

幕末維新期の西洋童話

——英語リーダーを仲立ちとする外国児童文学の受容——

川戸道昭

1. 欠落していた視点

日本における外国児童文学の受容に関する研究は、いまだ歴史も浅く、不備な点が多からず見受けられる。たとえば、日本の読者が、「シンデレラ」や「マッチ売りの少女」などの西洋の著名童話にはじめて出会うのは、一体いつの頃のことであったのか。そのことを確かめるために、研究書や事典をひもといってみても、翻訳に関する記述はみられるものの、翻訳が出現する以前の受け入れ状況についてはまったくといっていいほど言及されていない。ということは、日本の読者は、翻訳を通してはじめてそれらの童話に触れたのか。いや、そんなはずはない。現に、わたしは、幕末維新期に日本にもたらされた外国の英語リーダーに掲載されたグリムやアンデルセンなどの童話を幾つも見にしたことがある。実際に、当時の学校でそれらのリーダーが読まれていたという報告が残されていることから、それが日本の児童生徒を西洋童話の世界へといざなう最初の書物となったことはまちがいない。

なぜ、そのような重要な事実が、過去何十年もの間気がつかずにきたのか。一つには、児童文学の翻訳の歴史を受容の歴史と同一視するという過去の「伝統」にその原因があったと考えられる。あるいは、もっと単純に、英語リーダーにそのような童話や文学作品が載っていることに気がつかなかったということも考えられる。理由はどうあれ、この見落としが、従来の児童文学研究に大きな支障となってきたことは否定できない事実であった。

そこから生じてきた最大の問題は、外国児童文学の受け入れの起源が、実際よりも20年近くも遅れることになったことである。アンデルセンやペローの作品は、実際には、明治7、8年には日本にもたらされていたにもかかわらず、従来の研究では、その導入は、常に、翻訳のはじまる明治19年以降と受けとめられてきた。

それだけではない。外国英語リーダーによる受け入れを見落としした結果、翻訳が開始される時期にも大きなズレが生じることになった。たとえば、アンデルセンの「マッチ売りの少女」の翻訳は、従来の考え方に従うと、明治27年に『智徳会雑誌』に掲載された「可憐の燃木売」が最も早いということになるが、実際にはそれより8年も前に、『ニューナショナル第三読本直訳』という英語リーダーの教本に「小サキ燧火木売ノ女兒」と題する翻訳が載っている¹⁾。そうした教本に掲載された「直訳」をも含めるならば、「マッチ売りの少女」の翻訳の開始時期は、一挙に8年もさかのぼることになる。

これは単にアンデルセンの作品だけにかぎったことではない。ペロー童話にしても、グリム童話にしても、あるいはマザーグースの名称で知られる英米の伝承童謡にしても、そこに外国英語リーダーによる受容という観点を加えるか否かによって、初期の受け入れの実態が大きく異なってくる。本稿では、従来の研究にまったく欠落していたこの外

国英語リーダーによる受け入れという観点を新たに設定することによって、これまで空白の期間とされてきた幕末維新期の外国児童文学の受け入れ状況を明らかにしてみたいと思う。

2. 幕末維新期の英語リーダーと外国児童文学

まず、明治維新前後に日本の学校で用いられていた英語リーダーにはどんなものがあったのか、その確認からはじめよう。そこで当時の「開学願書」²⁾や文部省の『年報』(「第一年報」は明治6年)に掲載された英語教科書名を調べてみると、その頃の学校でよく用いられていたのは、ウィルソン、ユニオン、サージェント、チェインバーズの4つのリーダーである。なかでも、ウィルソン、ユニオンの2つは、他に比べて使用頻度が高かったことが当時の課程表などからみてとれる。そのうち、2番目のユニオンリーダーに関しては、編者がそれを編むにあたって特別に書き下ろしたと思われる散文や韻文が主で、小説や昔話の類はほとんど含まれていない。とくに児童文学関係の作品がよく取り上げられる1巻から3巻のところにそうした傾向が強く、管見したかぎり、作中に小説や昔話の類を確認することはできなかった。したがって、ここではユニオンリーダーをのぞく上記3編の外国リーダーについて、児童文学関連作品のリストを掲げ、合わせてそれらのリーダーが使用された学校や、その翻刻書・翻訳書の有無を一覧表にまとめることにする。幕末から明治7、8年にかけての、外国英語リーダーを通じた児童文学の受け入れ状況は、これによっておおむね全容を把握することが可能となるだろう。

1) ウィルソンリーダー

これは、福澤諭吉が慶応3年に2度目の渡米をした際に持ち帰って日本に広めたといわれるリーダーで、明治前半を代表する英語リーダーの一つであった。木村毅の『日米文学交流史の研究』には、本リーダーは「明治になると全国を風靡し、坪内逍遙、三宅雪嶺、加藤高明、八代六郎なども名古屋英語学校でこれをならっ」たとある³⁾。初期の小学校教育に与えた影響も大きく、明治6年に文部省が刊行した『小学読本』(田中義廉編)は、このウィルソンリーダーを翻訳したものとされている。ユニオンリーダー同様、小説や昔話の類はほとんどみられないが、それでも次のような児童文学関連の作品が見つかっている⁴⁾。

作者 (作品)	英語題名	巻	邦題 (参考)	著者名記載有無備考
イソップ寓話	A Fable	I	蛙と子ども	無
	The Boy and the Wolf	II	少年と狼	無
マザーグース	A man of words and not of deeds, (first line)	II	言葉だけの人	無
	I like little pussy, (first line)	II	子猫が好き	無
	Twinkle, Little Star	II	キラキラ星	無

原書の刊記と発行年	【第1巻】 <i>The First Reader of the School and Family</i> by Marcius Willson, Harper & Brothers, New York, 1860. 【第2巻】 <i>The Second Reader of the School and Family</i> by Marcius Willson, Harper & Brothers, New York, 1860.
日本における最初の翻刻書	【第1巻】 <i>The First Reader of the School and Family</i> by Marcius Willson, T.T. Ito, Tokio, 1879. [和文刊記] 伊藤徳太郎、明治11年12月5日翻刻御届 【第2巻】 <i>The Second Reader of the School and Family</i> by Marcius Willson, Book Selling Company, Tokio, 1881. [和文刊記] 丸屋善七ほか5書店、明治14年12月
日本における最初の教本	【第1巻】 西山義行訳『ウエルソン氏第一リードル独案内』（十字屋ほか3書店、明治16年2月） * 5章8課で中断、「蛙と子ども」の訳は再版（明治18年1月）から。同訳を含むものは、それ以前に、一川真輔訳『ウエルソン氏第一リードル独案内』（覚張栄三郎、明治17年3月）などが出ている。 【第2巻】 村井元道訳『ウエルソン氏第二リードル直訳』（三浦源助、明治15年4月11日御届） * 「キラキラ星」の本邦初訳を掲載
使用された学校及び使用年・使用巻	慶應義塾（M6、I～Vを使用）、共立学校（M6、I～IVを使用）、共慣義塾（M5、I～IIを使用）ほか多数
日本の教科書への影響	<i>The Monbushō Conversational Readers. No.3</i> （文部省、明治22年7月）に「キラキラ星」が転載される。* 改編箇所が同じことから、ウィルソンリーダーからの転載と確認できる。最初の3節のみ。

2) サージェントリーダー

ウィルソンリーダーと同様、幕末から明治前半にかけて使用された英語リーダーの一つで、慶応2（1866）年には、早くも最初の翻刻書（『英吉利幼学初編／First Reader』）が出版されている。そこには以下に掲げるマザーグースの原詩3編が含まれており、日本人の手になる最初のマザーグースの活字化として注目される。さらに、明治5年になると、「一、二、三、四、五／私ハ生キタルウサギヲトラエル」というマザーグースの原詩と訳文を掲載した『英学捷解 一名リードル独学』という教本が京都の書店から刊行される。残念ながら、First Reader の途中で終わっているために、マザーグースはこの1編にとどまるが、その翻訳が掲載された日本で最初の書物として注目される。このように、サージェントリーダーは、外国児童文学受の容史上、幾つかの興味深い問題を含む英語リーダーではあるが、各巻とも原書の残存例が少なく、訳文や翻刻書との詳しい照合が未だできない状況にある。そのことに留意した上で、児童文学関係の作品リストを掲げてみると、次のようになる。

作者（作品）	英語題名	巻	邦題（参考）	著者名記載有無備考
グリム	不詳	Ⅲ	くぎ（「鍔沓の釘の事」）	無、『サルゼント氏第三リードル』による
マザーグース	One, two, three, four, five; I caught a hare alive (first two lines)	I	かぞえうた	無、挿絵入り、『英吉利幼学初編』による
	I had a little pony, (first line)	I	かわいい子馬	無、挿絵入り、『英吉利幼学初編』による
	Thirty days hath September, (first line)	I	月の日数	無、『英吉利幼学初編』による

	Twinkle, twinkle, little star! (first line)	I Pt2	キラキラ星	無
原書の刊記と発行年	筆者が確認している原書は下記の1書のみ。本書に掲載されている以外の作品の確認は日本で出版された翻刻書・自習書に拠った。 【第1巻第2部】Sargent's Standard First Reader, Part Two, by Epes Sargent, John L. Shorey, Boston, 1872. (刊年は初版か不明)			
日本における最初の翻刻書	【第1巻】自琢斎蔵版『英吉利／幼学初編／FIRST READER』(慶応二年丙寅冬新刻) 英語刊記 The Standard First Reader, for Beginners, by Epes Sargent, 1866. *これが目下確認されているマザーグースを掲載する最初の翻刻書 【第1巻第2部】Sargent's Standard First Reader, Part Two, Rikugokwan, 1885. 【第3巻第2部】Sargent's Standard Third Reader, Part Two, N.Tsudzuki & U.Shimidzu, 1884.			
日本における最初の教本	筆者が確認している自習書は下記の2書のみ。 【第1巻】浦谷義春訳『英学捷解 一名リード独学』(浪華合書堂、明治5年7月) *第1巻72課までで終了しているものの、上記「かぞえうた」の訳を掲載。現在確認されている、マザーグースの最初の翻訳例。 【第3巻】松山棟庵訳『サルゼント氏第三リイドル』上下(慶應義塾蔵版、明治6年4月) *これは教本というよりは翻訳書。現在確認されている、グリム童話の最初の翻訳を掲載。			
使用された学校及び使用年・使用巻	培根舎(使用年不明。同舎の設立は明治5年7月) 大阪英語学校(M8、IIを使用) *『東京の英学』(東京都史紀要第16)には、東京府に提出された「開学願書」に記された使用教科書(の一部)を調べてみたところ、読本では、ウィルソンが8, サージェントが2, ユニオンが1であったとある。			
日本の教科書への影響	未詳			

3) チェインバズリーダー

チェインバズリーダーが、上記2リーダーと比べて異なっているのは、児童文学の宝庫ともいえるべき、大変文学性に富んだリーダーであったということである。そこにはイソップ寓話やアラビアンナイト、あるいは、ペロー童話、グリム童話、アンデルセン童話、さらには「美女と野獣」や「シェイクスピア物語」、マザーグースといった世界の児童文学作品が合計50編以上も含まれている。欧米の子どもたちが日頃目にしていた物語や昔話は、大体これによってその概要をうかがうことができる。しかも、重要なことに、それが用いられたのは、東京開成学校、東京英語学校、東京大学予備門といった当時の官学の主流をなす学校であった。それらの学校では、年度ごとに規則や教則が定められ、それに基づく系統だった英語教育が行われていた。たとえば、東京英語学校の明治8年の『教則』をみると、「第一年第六級」の授業において、チェインバズの第1読本が用いられ、「在期中」にそれを「卒ラシム」ということが記されている⁵⁾。同じように、「第一年第五級」では第2読本を、「第二年第四級」では第3読本を、さらに「第二年第三級」では第4読本を、それぞれ「卒ラシム」とある。つまり、入学後の2年間で、第1読本から第4読本のすべてに目が通されたということが明記されているのである(同校の入学は満13歳から)。文部省の『第三年報』(明治8年)には、その「教則」がそのまま同年度(明治8年1月～9年6月)の教育内容を伝える「年報」として掲げられていることから、大体そのとおりの教育が行われていたと考えていいだろう。ちなみに、東京英語学校の明治8年度の1、2年生の数は、同じ『第三年報』によると、599人となっており、その多くがここに掲げられた世界の名作を読んでいたと推測されるのである。

掲載されている作品の多彩さといい、それを読んだ生徒の数といい、日本における外国児童文学の受容は、このチェインバーズの英語リーダーとともに始まったと考えて、まずまちがいないものと思われる。

作者（作品）	英語題名	巻	邦題（参考）	著者名記載有無備考
アラビアンナイト	Alnaschar's Day Dreams	Ⅲ	アルナシャルの白昼夢	Arabian Nights の記載
	History of Hassan the Ropemaker	Ⅳ	縄ないハッサンの物語	Arabian Nights の記載
アンデルセン	The Little Match-Girl	Ⅱ	マッチ売りの少女	有
	The Fir-Tree	Ⅲ	モミの木	有
	The Wild Swans	Ⅳ	野の白鳥	有
	The Ugly Duckling	Ⅴ	醜いアヒルの子	有
イギリス古謡 (Old Ballad)	King Lear and his Three Daughters	Ⅲ	リア王と3人の娘	無
	Robin Hood and Allin a Dale	Ⅲ	ロビンフッド	無
	Sir Lancelot du Lake	Ⅲ	ランスロット	無
イソップ寓話	The Dog, the Cock, and the Fox	Ⅱ	犬と鶏と狐	無
	The Frog and the Ox	Ⅱ	蛙と牛	無
	The Hare and the Tortoise	Ⅱ	兎と亀	無
	The Ass and the Lapdog	Ⅱ	驢馬と抱き犬	無
	The Wolf and the Lamb	Ⅱ	狼と仔羊	
	The Stag at the Pool	Ⅱ	水辺の鹿	無
	The Ass and his Driver	Ⅱ	驢馬と驢馬追い	無
	The Husbandman and his Sons	Ⅲ	農夫と息子たち	無
	The Crab and her Mother	Ⅲ	蟹と母親	無
	The Fox and the Woodman	Ⅲ	狐と木樵	無
	The Travellers and the Bear	Ⅲ	旅人と熊	無
	The Lion, the Ass, and the Fox Hunting	Ⅲ	ライオンと驢馬と狐	無
	The Raven and the Fox	Ⅲ	黒丸鳥と狐	無
	The Hare and the Hound	Ⅲ	犬と兎	無
	The Boy and the Nettle	Ⅲ	少年と茨	無
	The Eagle and the Jackdaw	Ⅲ	鷲と小鳥	無
	The Wind and the Sun	Ⅲ	北風と太陽	無
	The Mountebank and the Countryman	Ⅳ	ペテン師と田舎者	無
	The Ass and his Masters	Ⅳ	驢馬と主人	無
	The Fox without a Tale	Ⅳ	尻尾の無い狐	無
	The Ass, the Fox, and the Lion	Ⅳ	驢馬と狐とライオン	無
	The Ass in the Lion's Skin	Ⅳ	ライオンの皮を被った驢馬	無
	The Bald Knight	Ⅴ	勇敢な騎士	無

	The Ass's Shadow	V	驢馬の陰	無
	The Horse and the Loaded Ass	V	馬と荷を背負った驢馬	無
	The Fir-tree and the Bramble	V	樅と茨	無
	The Fox and the Mask	V	狐と面	無
ヴィリエヌーヴ夫人	Beauty and the Beast	I	美女と野獣	無 有名な昔話。著者は Villeneuve 夫人のものが最もよく知られる
グリム	Hans in Luck	II	幸運なハンス	無
ペロー	The Glass Slipper	I	シンデレラ	無
	Little Red-Ridinghood	I	赤ずきん	無
ホーソーン	Midas, or the Golden Touch	II	黄金王	有 <i>Wonder Book</i> 中の一話
	The Miraculous Pitcher	III	不思議な水差し	有 <i>Wonder Book</i> 中の一話
	A Rill from the Town Pump	V	町の給水場	有 <i>Twice-Told Tales</i> 中の一話
マザーグース	Jenny Wren	I	ジェニー・レン	無
	Once I Saw A Little Bird	I	一羽の小鳥	無
	I saw a ship a-sailing (first line)	II	海行く船	無
	The fox jumped up in a hungry plight (first line)	II	狐の旅	無
ラム姉弟	The Tempest (A Tale from Shakespeare, adapted by Charles Lamb)	IV	あらし	有
	The Merchant of Venice, (From Lamb's Tales of Shakespeare)	V	ヴェニス商人	有
原書の刊記と発行年	<i>Chambers's Standard Reading Books I-V</i> , W. & R. Chambers, London and Edinburgh, 1873.			
日本における翻刻書	なし			
日本における教本	なし			
使用された学校及び使用年・使用巻	東京開成学校 (M6、「英法科予科第一級」にて使用)、東京英語学校 (M8、I～IVを使用)、東京大学予備門 (M15、Vを使用)、共立学校 (M25、IIIIVを使用) ほか			
日本の教科書への影響	<i>The Monbushô Conversational Readers. No.3</i> (文部省、明治22年7月) に「シンデレラ」「赤ずきん」が転載される。*改編箇所が同じことから、チェインバーズリーダーからの転載と確認できる。そのほか、坪内逍遙著『国語読本』(富山房、明治33年) に「シンデレラ」「黄金王」の翻案・再話が掲載される。			

3. 受容史上の意義

このように、幕末維新期に日本にもたらされた英語リーダーのなかには、意外なほど、文学性に富んだものもあり、それを読んだという証拠が随所に残されていることから、その内容と使われた学校を調べていけば、これまでほとんど空白期間とされてきた幕末から明治7、8年にかけての外国児童文学の受容の実態が明瞭に浮かび上がってくる。本来ならば、さらにこの調査を、ナショナルやスウィントン、ロングマン等のリーダーが使われはじめる明治10年代後半から20年代にまで拡張していく必要があるが、今回は紙数の制限もあるので、それは別の機会に譲ることにする。その代わりに、ここでは、ナショナルやスウィントン等のリーダーをも含めた英語リーダーが、海外の児童文学を日本に導入する際に果たした重要な役割について、簡単にまとめておくことにする。明治前半の外国児童文学の受け入れが、英語リーダーを核とする当時の英語教育に大きく依存していた以上、その役割をまとめることが、同時に、初期の外国児童文学の受け入れ全体の特徴をまとめることにもなるということは、ここに改めて強調するまでもないだろう。ともあれ、その主な役割を概説すると、次の5点になる。

1) 日本の読者が外国児童文学と出会うきっかけを作った

まず注目したいのは、上記3リーダーが使われはじめる時期と、そこに掲載された作品の翻訳が出まわりはじめる時期の差である。両者の間には、作品によって異なるが、平均すると10年以上の開きがある。少なくとも、それぞれのリーダーが使われはじめた時点で、すでに翻訳が出まわっていた作品は、イソップ寓話の一部をのぞくとほとんど見あたらない。つまり、上に掲げた作品リストは、日本人がはじめて出会った外国児童文学のリストということになり、それを収録した英語リーダーは、日本の読者（大半は英語を学習する10代前半の生徒たち）が外国児童文学と出会うきっかけを作った書物ということになる。

2) 外国児童文学を日本に浸透させる主要な媒体となった

英語を学ぶ学生の多くが手にする英語リーダーにそれが掲げられていたということは、そのリーダー自体、日本の土壌に外国児童文学を根づかせる重要な媒体となっていたと考えなければならない。たとえば、有名な「キラキラ星」を例にそれを説明すると、これまでの研究では、この詩の翻訳は、明治期全体を通して、後にも先にも『幼稚園唱歌』（明治25年7月）という歌集に掲載された翻訳ただ1編ということになっていた⁶⁾。要するに、それ以前は、受容史上の空白期とみなされていたのである。ところが、実際には、幕末期に日本にもたらされたウィルソンリーダーにその詩が載っていて、多くの人がそれを目にしうる状況にあった。そればかりか、同じ詩は、サージェントリーダーにもナショナルリーダーにも掲載されていて、明治22年になると、『正則文部省英語読本』（第3巻）という日本製の英語読本にも転載されていく。翻訳だけを取り上げていたのではまったく見えてこない状況が確実にそこには存在した。言い換えるならば、日本の土壌に「キラキラ星」の詩を浸透させる役割を担ったのは、翻訳よりは、むしろ英語リーダーであったということになる。これは単に「キラキラ星」だけにかぎった話ではない。「シンデレラ」や「赤ずきん」、「マッチ売りの少女」など、上の一覧表に掲げた作品の多くは、みな同様な状況にあったということを、われわれは改めて認識する必要がある。

3) 初期の翻訳の底本となった

それだけではない。大変興味深いことに、それらの英語リーダーに掲載された作品と、初期の翻訳との間には、きつてもきれない密接なつながりが認められる。たとえば、アンデルセンの作品で現在知られる最も早い翻訳は「はだかの王様」の翻訳だが、どういうわけか、明治 20 年をはさんで立て続けに二つの翻訳が発表された。すなわち、『RÔMAJI ZASSHI』と『女学雑誌』に掲載された翻訳がそれだが、訳文を見ただけでは、なぜ2つの翻訳が連続して出版されたのか、その背後の状況はまったく見えてこない。しかし、そこに英語リーダーを重ね合わせてみると、すぐにそれがナショナルリーダーからの翻訳であったということが明らかになる。つまり、それらの翻訳は、明治 18 年頃になって急速に日本の教育界に出回りはじめたナショナルリーダーの存在なくしては、ありえない翻訳であったのである。明治期に翻訳されたアンデルセン童話の翻訳点数をかぞえてみると、最も多いのは「はだかの王様」の 19 点、その次が「マッチ売りの少女」の 17 点、いずれもナショナルリーダーに英訳が掲載されていることから、すぐにその影響ということが頭に浮かぶ。しかし、それだけでは、実際にどこまでナショナルリーダーの影響であったのか判断できないので、明治期に出版された「はだかの王様」の全翻訳について、ナショナルリーダーのテキストと照合してみると、実に7割近くの翻訳がナショナルリーダーの影響を受けた翻訳であることがわかった(拙稿「馬に乗った裸の王様」参照 7)。明治期の英語リーダーは、外国児童文学を普及させる重要な媒体となっていただけでなく、初期の翻訳の底本ともなっていたことが、これによって明らかになったのである。

4) その「直訳」が本邦初訳となる例が少なくなかった

わたしは、今、アンデルセン童話の最も早い翻訳は「はだかの王様」の翻訳であるということ述べたが、正確にはそれは正しくない。『RÔMAJI ZASSHI』に掲載された「はだかの王様」の翻訳(明治 19 年 11 月)よりも9ヶ月前に「マッチ売りの少女」の翻訳が、『ニューナショナル第三読本直訳』という教本(「直訳」や「独案内」の文字をとまなう)に載っていることが確認されているのである。今、そうした英語リーダーの教本に掲載された翻訳をも含めるならば、外国児童文学の本邦初訳の年は従来のものとは大分違ったものとなってくる。たとえば、グリム童話を例にとると、これまでグリム童話の本邦初訳は、明治 19 年の「羊飼いのわらべ」(『RÔMAJI ZASSHI』掲載)が最も古いとされてきたが 8)、つい最近になって、横浜国立大学の府川源一郎氏により、明治 6 年に出版された『サルゼント氏第三リイドル』に、「鍍沓の釘の事」(原作「くぎ」といふ)というグリム童話の翻訳が載っていることが報告された。この発見により、グリム童話の初訳の年は、一気に 13 年もさかのぼることになったのである。マザーグースについても、事情は同様で、そこに教本中の翻訳を含めることにより、「キラキラ星」の初訳は明治 15 年に、「メリーさんの羊」は明治 19 年に、さらにマザーグースの一番古い翻訳は明治 5 年に、それぞれ変更されることになった。要するに、上の一覧表に掲げた作品で教本の翻訳が出ているものは、イソップ寓話などの一部を除き、基本的に本邦初訳であったと考えていいことになる。これらの教本の中には、「(メリー)ガ雪ノ様ナル白キ小羊ヲ畜テ居リマシタ」というように、子どもを意識した「言」と「文」の接近した口語的表現が見受けられることから、近代児童文学の文章上の変遷をたどる上でも、欠かせない文献という

ことができるのである。

5) 日本で出版された英語教科書や国語読本に素材を提供した

英語リーダーに掲載された作品の中には、1つのリーダーだけではなく、複数のリーダーに共通して取り上げられている作品がよく見受けられる。先述したマザーグース中の「キラキラ星」はその好例で、同詩は、詩句に多少の違いがみられるものの、ウィルソンリーダー、サージェントリーダー、ナショナルリーダーと、3つのリーダーに共通して取りあげられている。後続の編集者が、先行するリーダーを参照するというのはよくあることだから、それ自体驚くに値しないことだが、注目すべきは、さらにそれが国境を越えて、日本の教科書にも収録されていることである。たとえば、同じ「キラキラ星」は、明治22年に出版された『正則文部省英語読本』(第3巻)に、1頁分の紙面を使って挿絵入りで取りあげられている。あるいは、「キラキラ星」以外にも、同じ『正則文部省英語読本』(第3巻)には、有名な「シンデレラ」と「赤ずきん」の話が載っている。両作ともに、文章の細部が一致することから、チェインバーズのリーダーからの転載であったことがすぐに見てとれる⁹⁾。明治8年以降、一部の英学生の間で親しまれてきた「シンデレラ」と「赤ずきん」は、ついに、明治22年に至って、日本の英語教科書にも取りあげられることになったのである。その時点で出まわっていた翻訳といえば、「シンデレラ」に関するものが2編あるだけで、「赤ずきん」についてはまったく知られていなかった。さらに、明治30年代に入ると、今度は、坪内逍遙の編纂する『国語読本』に、「シンデレラ」と「はだかの王様」の翻案が収録される¹⁰⁾、というように外国英語リーダーに掲載された児童文学は、日本の読本類にまでその影響の範囲を広げていった。逍遙の読本が画期的であったのは、それまでの読本とは違い、そこにはっきりと「文芸趣味の養成」という目標が掲げられていることである。外国英語リーダーに掲載された児童文学作品は、逍遙という近代文学の先駆者の手で、ついに、児童生徒の文芸趣味を育む読み物として全国の小学校に送られることになったのである。

以上、ここに掲げた5項目は、どれ一つをとっても初期の外国児童文学の受け入れに深く関わる重要なものばかりである。日本における児童文学の受容史は、この外国英語リーダーを仲立ちとする受け入れを抜きにして、とうていその全容に迫ることはできないということになる。

[注]

- 1) 拙稿「明治のアンデルセン—出会いから翻訳作品の出現まで」『明治期アンデルセン童話翻訳集成 第五巻』(ナダ出版センター、1999年11月)
- 2) 『東京の英学』東京都史紀要 第16(東京都都政史料館、1959年3月)掲載のものを参照
- 3) 木村毅『日米文学交流史の研究』(恒文社、1982年6月) 552頁
- 4) このうち『イソップ寓話』に関しては、府川源一郎「イソップと明治の教科書」『図説児童文学翻訳大事典 第4巻』(大空社・ナダ出版センター、2007年6月)を参照。マザーグースに関しては、拙稿「明治のマザーグース—英語リーダーを仲立ちとするその受容の全容—」『児童文学翻訳作品総覧7』(大空社・ナダ出版センター、2006年3月)、鷲津名都江『ようこそ「マザーグース」の世界

- へ』(NHK ライブラリー215、2007年1月)を参照。
- 5) 『東京英語学校教則』(東京英語学校、明治8年) 2頁
 - 6) 鷲津名都江『マザーグースと日本人』(吉川弘文館、2001年11月)
 - 7) 拙稿「馬に乗った裸の王様—アンデルセンの翻訳に与えた『ナショナル・リーダー』の影響—」『児童文学翻訳作品総覧5』(大空社・ナダ出版センター、2005年12月)
 - 8) 川戸道昭ほか編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』(ナダ出版センター、2000年7月)
 - 9) 拙稿「明治の『シンデレラ』と『赤ずきん』—日本に西洋童話が根づくまで—」『児童文学翻訳作品総覧3』(大空社・ナダ出版センター、2005年9月)
 - 10) 拙著『図説日本の外国児童文学』(『図説児童文学翻訳大事典』[大空社・ナダ出版センター、2007年6月]の第1巻) 91 - 93頁